

## 第118回ブッククラブ 中田からのおススメ本 (2025年3月、文藝春秋)



(著者は現役商社マン)



特設サイト <https://books.bunshun.jp/sp/ma-ya>

漫画·黑沢明世



8日

2025年9月8日月曜日 19:00

## 第118回ブッククラブ『いのちの初夜』 北條 民雄 オンラインイベント

いのちの初  
北條民雄 Tamio H



撮影地：多磨全生園全生園内、2025.9/8)

- 1914 (大正3) 朝鮮・京城（現ソウル）生まれ。徳島県育ち。  
 (注：父親は陸軍勤務。本名を含め公式に明らかになったのは2014年)
- 1929 (昭和4) 上京。文学を志しながら職業を転々。
- 1933 (昭和8) 19歳 ハンセン病を発病。
- 1934 (昭和9) 5月 20歳 東村山村全生病院に入院。8月 川端康成に手紙。
- 1936 (昭和11) 『いのちの初夜』を発表、芥川賞候補に。（川端の絶賛。発表直後から話題に）
- 1937 (昭和12) 12月 腸結核で逝去。享年23歳



- 1947 日本で特効薬プロミンの使用開始
- 1953 「らい予防法」成立、強制隔離政策の強化
- 1974 映画『砂の器』
- 1996 「らい予防法」廃止、菅厚生大臣が患者団体に謝罪
- 2001 国家賠償請求訴訟で原告勝訴（熊本地裁）、  
 国（小泉首相）は控訴せず
- 2003 熊本県内のホテルの宿泊拒否事件
- 2015 映画『あん』



参考 (2023年5月、かもがわ出版)

# 『いのちの初夜』（1936）について

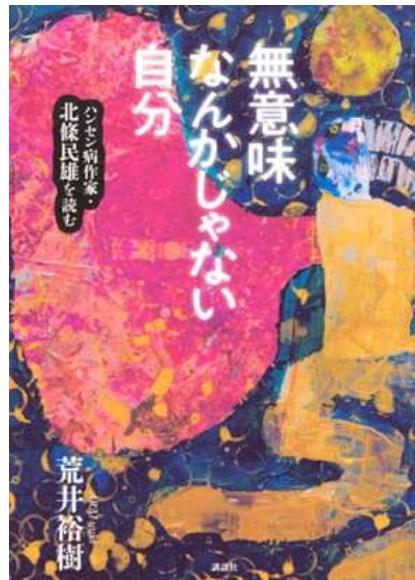
（文庫カバー裏より）

書くことだけが自分の生存の理由だ。

しみじみと思う。怖しい病気に憑かれしものかな、と——。

若くしてハンセン病を患った青年は、半ば強制的に療養施設に入所させられる。自分の運命を呪い、自殺すら考えた青年を絶望の淵から救い出したのは、文学に対する止めどない情熱だった。

差別と病魔との闘いの果て、23歳で夭折した著者が描く、力強い生命の脈動。施設入所初日のできごとを克明に綴った表題作をはじめ、魂を震わす珠玉の短編8編を収録。



（2025年5月、講談社）



（1955初版、2023改版7版、  
角川文庫）

（作者・北條民雄に与えられてきた世間の評価）  
生命の根源的な意味を文学作品に結晶化した孤高の天才  
病苦と戦いながら唯一無二の輝きを放った悲劇の作家

『いのちの初夜』発表時  
小林秀雄

「いづれにせよ稀有な作品だ。寧ろ文学そのものゝ姿を見た」

中村光夫

「人間をただ裸形の人間と見、そこから文学に出発しているほとんど唯一の作家」

# 『いのちの初夜』の内容

- 冒頭 主人公・尾田高雄が病院の**格の垣根**に沿って歩く場面  
「やっぱり今死んだほうが良いのかもしれない」 (p. 6)
- 先輩患者の佐柄木（一目で患者と分かる容貌。病室の付き添い）に連れられて重病室へ (p. 18)。  
**耐え難い嫌悪感**に居たたまれなくなり、病室を抜け出し自死を試みる。  
(ああ、びっくりした)
- **火炙り**にされる悪夢。絶望。
- 周囲の重症患者をみて「**生命の醜惡な根強さが呪わしく思はれた**」 (p. 41)
- 佐柄木が尾田に語る言葉 (p. 46)  
「人間ではありませんよ。いのちそのものなんです。ただ、生命だけがびくびくと生きているんです。誰でも癪になった刹那に、その人の人間は亡びるのです。死ぬのです。廃人なんです。  
……けれど、尾田さん、**僕らは不死鳥**です。新しい思想、新しい眼を持つ時、全然癆者の生活を獲得する時、**再び人間として生き復る**のです。復活そう復活です」
- 同 (p. 49) 「盲目になるのは分かっていても、尾田さん、**やはり僕は書きますよ**」



多磨全生園 (2025. 9/8)

荒井

「崇高な生命觀の発露として読み継がれてきたこの部分にこそ、痛々しく、小心で、卑俗な青年の姿が読み取れるのではないか」

# 全生日記（北條民雄の日記。『定本北條民雄全集』下巻所収、1996年9月）

1934（昭和9）年7月13日（入院の2か月後）～1937（昭和12）年11月9日（死去の1か月前）

荒井 「北條は日記の方が面白い作家」 (p. 174)

1937年（最期の年）の日記は、親友・東篠耿一により書き換えられている。

→ 後世の学者は大迷惑。同じ病気を患い同じ病院で生きた東條は、彼なりの「生きる意味」をこつそりと忍ばせたのではないか。痛々しくも必死な姿を全力で受け止め語り伝えていきたい。 (p. 235)

34年 7月25日 「なんとしても書かねばならぬ。書くことだけが自分の生存の理由だ」

35年 7月 5日 「僕たちはせめて文学を、正しい文学を守ろう」

36年10月30日 「俺は結婚したいが、精系手術のことを考えたらいやになっちまう」

2月 4日 「同情ほどたまらないものが他にあるだろうか。それは同情されねばならんほど自分が無価値で無意識な存在を証明するもの。それが俺にはたまらないのだ」

2月 5日 「なんという屈辱。俺の頭脳は彼等よりはるかに優れている。  
彼等凡俗に俺が判ってたまるものか」 （注：検閲する病院事務員への批判）

37年 8月13日 「東條には深い尊敬を覚える。私は良い友を持った。幸福である」

10月17日 「しみじみと思う。怖しい病気に憑かれしものかな、と。  
慟哭したし。泣き叫びたし。この心如何にせん。」

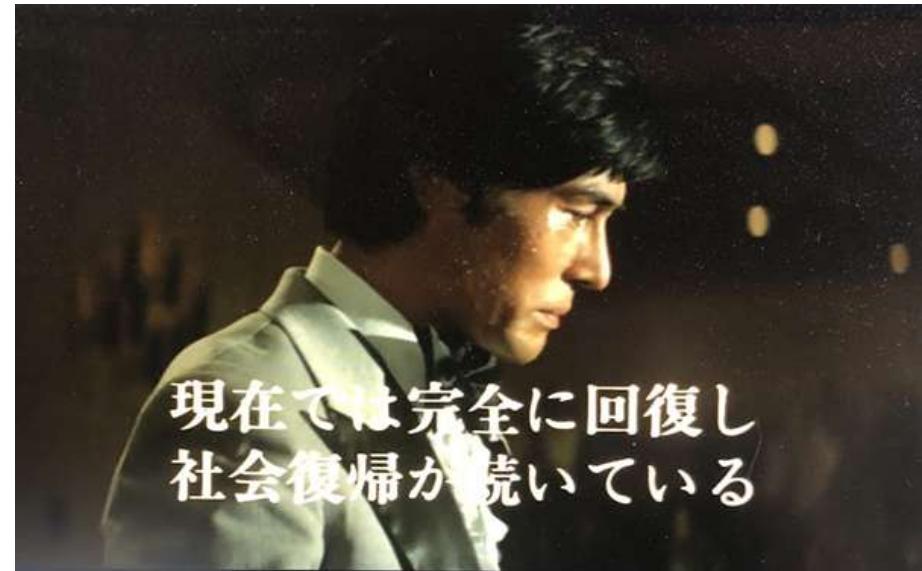
11月 7日 「朝食7時半 粥半椀、梅干し半ヶ。昼食10時半 粥半椀、梅干し半ヶ、  
豆腐小量。12時に牛乳一合、林檎汁少量（食欲ナシ）。」

12月 5日 扱曉 腸結核で死去。享年23歳。午後には川端康成らが弔問。 国立ハンセン病資料館 (2025.8/28)





公開日：1974年10月19日（土）



ラストシーン近くのテロップ  
「ハンセン氏病は医学の進歩で特効薬もあって、  
現在では**完全に回復し社会復帰**が続いている。  
それをこばむものは、まだ根強く残っている  
**非科学的な偏見と差別**のみで、本浦千代吉のよ  
うな患者はもうどこにもいない」

公開日：2015年5月30日



## オーナー（浅田美代子）

「あんた知ってる？らい病ってさ、ひどい人になると、指が落ちたりするのよ。鼻とかも溶けちゃったりして」

雇われ店長・千太郎（永瀬正敏）

「徳江さん、指ありますよ。鼻もありますよ」



「あんを炊いているときのわたしは いつも、小豆の言葉に、耳を澄ましていました。

それは、小豆がみてきた雨の日や晴れの日を、想像することです。どんな風に吹かれて小豆がここまでやってきたのか、旅の話を聞いてあげること。

そう、聞くんです

## 『いのちの初夜』『あん』の舞台（東京・東村山市）



「どら春」のセットがあった場所  
(桜並木)



千太郎行きつけの蕎麦屋（久米川駅前）



お食事処 なごみ (2025.8/28)  
<http://an-nagomi.com/>



久米川電車図書館  
ワカナが『よるくま』を読んであげる。



納骨堂（以下、多磨全生園 2025.9/8）



永代神社



国立ハンセン病資料館  
<https://www.nhdm.jp/>

# 「食と農の未来フォーラム」開催中です。



写真:野生キンラン（東京・東村山市）、塙渡いボランティア（福島・喜多方市）、PresentTree植樹イベント（山梨・笛吹市）

## 1 開催の趣旨と目的

- (1) 現在、食と農は、様々な深刻な課題に直面しています。  
例：食料自給率の低迷、担い手、農地など生産基盤の脆弱化、栄養バランスの崩れと食生活の乱れ、膨大な食品ロス等
- (2) これらの課題の多くは、「食(食卓、消費者、都市)と農(产地、生産者、農村)の間の距離」が離れてしまっていることに起因しています。  
多くの都市の消費者にとって、食べものは、お金さえ出せばいつでもいくらでも買える單なる「商品」に過ぎなくなっています。  
おり、それがどこで、どんな人によって、どのように生産され、食卓まで運ばれてきているかを想像できなくなっています。
- (3) 本フォーラムは、都市の一般市民（消費者）の方々を主な対象として、食と農の現場の実情と課題を身近に感じ、理解し、  
ひいては自主的な行動変容につなげて頂くことを期待して、中田哲人（ウェブサイト「フード・マイレージ資料室」の主催  
により開催するものです。  
食や農の現状に興味・関心をお持ち方など、幅広い皆様の参加をお待ちしています。

## 2 スケジュールと内容

### 【第1回】2025年6月30日（月）午後7時～9時、オンライン【終了】

「食と農の未来フォーラムの開催についてなぜ農業問題は都市住民（消費者）の問題なのか」（仮題）をテーマに  
中田から説明と問題提起を行い、今後の取り進め方や要望等について意見交換。  
[概要、説明資料→]

### 【第2回】7月23日（火）午後7時～9時、オンライン【終了】

ゲスト：大友 治さん（本木・早稲田 塙と里山を守る会、福島・喜多方市山都）  
テーマ：「米は田んぼだけ作られるのではない 稲作が生産するのは米だけではない  
—江戸時代から山間部の梯田を潤す本木上塙の現状と課題—」  
[概要、説明資料]

### 【第3回】8月26日（火）午後7時～9時、オンライン【終了】

ゲスト：鈴木純子さん（ふくしまオーガニックコットンプロジェクト、福島・いわき市）  
テーマ：「原発被災地でオーガニックコットンを育て「続け」ること」  
[概要、説明資料]

### 【第4回】9月20日（土）午後7時～9時、オンライン

[申込先→] <https://peatix.com/event/4561122/>

ゲスト：榎田みどりさん（農業ジャーナリスト、明治大学客員教授）  
テーマ：「都市住民こそ他人事じゃない！ 私たちの食べものは大丈夫？」（仮題）

### 【第5回以降】

(1) 毎月1回程度の頻度で、食や農の「現場」に精通しているゲストをお招きして開催  
(2) 基本的にオンライン（zoomを利用）、年数回は料理教室や現地見学会をリアルで開催  
(3) ゲストの人選や内容については、参加者からの意見・要望を踏まえて決定

食や農の現状に問題意識をお持ちの方。これまであまり考えたことはなかったけれど興味・関心をお持ち方など、幅広い皆様の参加をお待ちしています。

## 3 主催

ウェブサイト「フード・マイレージ資料室」（主宰・中田哲也）→  
メール：[foodmileage@atmail.jcom.home.ne.jp](mailto:foodmileage@atmail.jcom.home.ne.jp)

[←協力：（一般社団法人）アクティビサポーターズ]



写真は左から東京・青山公園（2025.3/30）、新潟・上越市大賀（2025.8/9）、枝豆を収穫する榎田みどりさん

## 【第4回】9月20日（土）午後7時～9時、オンライン

[申込先→] <https://peatix.com/event/4561122/>

ゲスト：榎田みどりさん（農業ジャーナリスト、明治大学客員教授）  
テーマ：「都市住民こそ他人事じゃない！ 私たちの食べものは大丈夫？」  
（仮題）